

E. A. Poe の詩に現れた 死と愛との聯合について

江 口 裕 子

Poe の作品中所謂純然たる Imagination の作品に屬するものは詩五十三篇の外散文物語七十篇の中の約三分の一を占めてゐるが、大方の作品は死を主題としてゐるか、主題とならぬ迄も殆ど常に incidental な事件として導き入れられ、死の影は到る所に立ち現はれて來る。その中でも詩十篇、散文中 *Morella* (1835), *Legeia* (1838), *Eleonora* (1842), *The Fall of the House of Usher* (1839), *The Oval Portrait* (1842) 等は女人の死を主題とし、妄執的な病的心理から動機なき殺人を犯す例が *Berenice* (1835), *Imp of the Perverse* (1835), *William Wilson* (1839), *Black Cat* (1843), *Tell-Tale Heart* (1843) 等の佳篇、復讐心からの嗜虐的な殺人が *Cask of Amontillad* (1846), *Hop-Frog* (1849), 怪奇な宿命の死を描いたものに *Metzengerstein* (1832), *Masque of the Red Death* (1842) があり、*Assignment* (1832) は romantic な約束死、*Colloquy of Monos and Una* (1841) は生命の終つた直後の状態を描き、*The Pit and the Pendulum* (1843), *The Premature Burial* (1845) 等は死に直面した恐怖を驚くべき迫眞力を以て描いて居り、之らの作品の多くは死と破滅に關する人間の逃るべからざる宿命や因果應報の恐ろしさを交へて讀者の心に恐怖と戦慄を呼び起す効果を狙つて居て、彼が屢々「死と恐怖」の作家といはれる所以であるが、その取上げ方は様々異なれ作家 Poe が死に對して異常な迄の關心を持つて居り、むしろ彼自身が絶えず死の幻影に憑かれ、宿命觀のとりことなつてゐた作家であつたといへるであらう。

これらの想像的作品の中で Poe が最大の關心を以て描いてゐると見られるものは美しい女人への愛とその死である。この主題が最も純粹な形で現はれてゐるのは詩に於てであるが、この小論では主として詩に現はれた死と愛の觀念がどの様に有機的に結合して生涯の作品の中核をなし、美の創造に參與したかを、彼の生活體驗と對照させ乍ら考察したいと思ふ。

詩の中で傑作として定評のある *The Raven* (1845), *Ulalume* (1847), *An-nabel Lee* (1849), 又 *To One in Paradise* (1834), *The Sleeper* (1842), *Lenore* (1843) 等大方愛する女人の死に逢つてそのかみの愛を追慕し、失はれた愛人への哀惜と憂悶の情をうたはぬものはない。愛と死の主題は古今の文學作品殊に浪漫作家のそれに屢々現はれる所だが、Poe ほどこの永遠の主題を繰返しうたひつゞけた詩人は類稀であらう。Poe 自身はこの主題を選んだのは純然たる推論の結果であるといひ、*The Philosophy of Composition* (1846) の中で人間の最も強く最も純粹な快感は美の觀照にある故に美をこそ詩の正しい領域であると定義して、美をうたひ出す最適な詩的情調として憂愁を選び、更に憂愁なるものうち最も憂愁なる主題として死を採り、之を美と結合して、「美しき女人の死」といふ結論を得た創作過程について明確な論理的解明を與へてはゐるが、如上の詩に現はれた女人の讚美とその死にあつて追慕おく能はず、希望の喪失を歎く哀切眞摯の情は彼の説く詩作の演繹的論理の明快さにも拘らず、この種の主題が直觀と體驗から生れたものであり、彼の内的生命との結びつきに於いて把へられ、或時は鋭く激越に、或時はたゆたふ旋律となつて終生うたひつゞけられたことを物語つてゐる。もとより彼の詩論や探偵小説、心理小説を通して彼がすぐれた科學的合理的精神と、近代的な分裂心理の解剖家としての反面を備へてゐたことを見通すべきではないが、Poe が最も直截端的に内面世界を表白してゐる抒情詩や、*The Fall of the House of Usher*, *Eleonora Shadow* (1835), *Silence* (1838) 等の作品を通して見た Poe は醇乎たる浪漫派の精髓を傳へる作家である。但し Poe のやうに人間世界の panorama

に無關心であり、人間性の包攝的な知識や理解に乏しい作家の藝術は勢ひ抒情的にならざるを得ず、主觀的な氣分や情緒の表現に限定され勝ちであり、しかも Poe が描き得たのは悲歎、絶望、不安、恐怖といふ様な原初的な情緒に限られ、人間のエトスとの結びつきを缺いた感覺感情にのみ訴へる性質のものである點で彼の創造した詩美の世界は他の追隨を許さぬものであつたとしても結局は、全體世界の一斷片を描き出すにとどまつてゐるのである。

ともあれ Poe は如上のやうに逝き愛人の死を主題として、その愛と美とを理想化してうたふのを好んだが、詩を以て美の至上的表現とし、理想美の創造に腐心した Poe にとっては、至上の美 *Supernal Loveliness* を現象界に於いて具現するのは美しく氣高い女人の姿であり、詩人の心には絶えず美の偶像としての女人の姿が存在してゐた事は確かである。初期の詩 *Al Aaraaf* (1829) では美は *Nesace* といふ天界の女人に象徴され、彼女の主宰する星 *Al Aaraaf* は人間や、天使たち程の叡智をもたぬ精靈たちの棲む、この世の美の一切を顯示する境界である。*Nesace* は創造主の命をうけてその榮光を他の境界に顯すため「美」と「愛」の僕である精靈たちをひきゐて出發する。詩の中心思想はやゝ不明瞭であるが、*Woodberry* は Poe がこの詩で美が神の直接的啓示である事を詠つたものと説いてゐる。又 *Helen, thy beauty is to me* に始まる有名な *To Helen* (1827) の詩想は、彼の理想美への憧憬と、永遠に女性的なるものへの憧憬の全き合致を示す作である。女性の *image* は美の *symbol* として希臘の女人像を偲ばせる典雅な女人の姿に理想化され、詩人の魂は漂渺とした美の雰圍氣に包まれて、故郷なる美のイデアの境へ運び行かれる。美の理念を體現した古典的世界は詩人の魂の故郷として偲ばれてゐる。この詩は一説には十四歳の時の作と傳へられるが、殆ど彫琢の跡も止めぬ詩形の古典的端正さと優雅さ、想像と理性との完全な調和、圓熟した思想から見てそれとは信じ難いものがある。

Helen, thy beauty is to me
 Like those Nicean barks of yore,
 That gently, o'er a perfumed sea,
 The weary, way-worn wanderer bore
 To his own native shore.

On desperate seas long wont to roam,
 Thy hyacinth hair, thy classic face,
 Thy Naiad airs have brought me home
 To the glory that was Greece
 And the grandeur that was Rome.

Lo! in yon brilliant window-niche
 How statue-like I see thee stand!
 The agate lamp within thy hand,
 Ah! Psyche, from the regions which
 Are Holy Land!

この詩に描かれた女人は詩人の故郷なる美の國土から遣はされた使者であり、彼と理想境をつなぎ合せる架橋でもある。その手に掲げた agate lamp は愛の光を表し、久遠の女性像であると同時により高い永遠なる美と愛を象徴してゐるのである。この永遠なるものの啓示としての美への憧れは Poe の romantic idealism の現はれと考へられる。

浪漫的性格の一つの共通性は、人間は有爲轉變してやまない有限な現象世界の彼岸にある永遠にして絶対なる存在に到達し得べき運命をになつてゐるといふ一種の信仰と豫感であり、それへの無限な憧憬であつた。事物一切の移ろひ行く現實世界に於いて人間は時間のはかなさと生命の限界について知り、この必然性から逃れ得ぬことを自覺する。この不安に曝された人間は時空の形式の制約を越えて永遠にゆるぎなきものを求め、個々の肉體

的生命はこの制約を逃れることが出来なくてもその精神的生命の連続のみは可能ならしめたいと希ふ。浪漫人の憧憬は常に自己を越え、生活や體驗の限界を越えて無限に永遠不死なものを追求しようとする衝動であり、しかも人間の體驗は有限なものであるから、彼は體驗と永遠への意志との間に矛盾を見出し、現在の生活に安住することなく絶えず不安と未來への無際限な憧憬に悩む人間となる。この憧れは何時いかなる形で充足されるかは分らない。が人はいつかは何處かでそれが充されるであらうといふ一種の信仰に勵まされてはてしなく漂泊する。その漂泊の旅が人生であるといふ考へは浪漫人に共通する觀念であり、この憧憬は Novalis (1749—1832) の「青い花」¹ に結晶したのであるが、多くの浪漫家はこれを愛の概念と結びつけ、憧憬と愛とが無限永遠なるものゝ把握を可能ならしめると考へ、こゝに愛の形而上學的價值づけがなされた。Schleiermacher (1768—1834) の宗教愛はその代表的なものだが、彼は宗教とは思惟や實踐ではなく宇宙の直觀と感情とであり、直觀によつて凡ゆる有限なものゝ中に無限者を、その表現や行爲を見、個體を全體の中にのみ見出すこと、この無限の絶えざる示顯の直觀から生れる歸依の感情 Schlechthinnige Abhängigkeitsgefühl が宗教心であると考へた。宗教は直觀と感情に媒介される宇宙と人間の關係である。又個人と人間性の關係は人間と宇宙との關係にひとしい。我々が同胞は我々と同じものであり、その人格は全人間性を包括するものであり、同時に人間性の特殊な一表現に外ならぬと考へる時之から自然と親愛の情が生れる。この愛によつて人間の中に人間性を發見し、之を見出して世界を發見すること、即ち他の人間の中に無限と宇宙を把握すること、之が愛の最も高い意義内容であつた。

この様な愛の解釋は正に浪漫精神の反映であり、人世の常なる男女の愛情も無限との繫りに於いて卑俗さを抜き取られ、神祕にして高貴な衣を纏ふことになる。「永遠に女性的なるもの我らをひき行く」といつた Goethe

1 Novalis: Heinrich von Ofterdingen, 1800.

(1749—1832) にせよ、戀人 Sophie の死によつてより高次の靈の世界に目醒めた Novalis にせよ、その他多くの浪漫家が屢々無限への憧憬を現實界の女性への愛に結びつけ、生の昇華をなし得たのは不思議ではない。

Poe の美への愛もこの無限への憧憬の現はれであり、それは又美の具現である女性への憧憬ともなつた。彼の永遠を求める衝動所謂 the desire of the moth for the Star¹ はこの有限界に於いて浪漫化された女性への愛とその美の觀照によつて靜められたのである。古典的浪漫家といはれる Ludwig Uhland (1787—1862) の言をかりるなら浪漫的といふことは「無限なるものを完全な明瞭さで自己の中に取入れることの決して出来ないことを感じながら、定まる所なく彷徨する要求に疲れた人間の精神は、超地上的なものゝ一瞥をあたへる様に思はれる地上の形象に間もなくその憧憬を結びつける……この我々の最も深い心持が形象の中に神祕的に現はれること、この世界精神の出現、この神の人間化、一言でいへば觀照の中に無限を豫感すること」であつた。Poe にとつて女性は不滅な美への憧れに結びつけられた美しい具象に外ならなかつた。彼はこの具象の中に啓示された永遠不滅なものを詩によつて顯現し、定着しようとしたのである。そして彼は詩と愛とによつて醫しがたい美への欲求を充さうとしたのであつた。この欲求を彼は *The Poetic Principle* (1850) の中で Human Aspiration for Supernal Beauty と呼び、これを詩の本質と見なしたが、浪漫家がひとしく抱いた永遠への郷愁、しかも到達しがたく思はれる彼岸的な榮光への郷愁は Poe の場合次の一節に最も明瞭に現はれてゐる。

An immortal instinct, deep within the spirit of man, is thus, plainly, a sense of the Beautiful.....There is still a something in the distance which he has been unable to attain. We have still a thirst unquenchable,.....this thirst belongs to the immortality of Man. It is at once a consequence and an indication of his perennial ex-

1 Shelley: To——, 13.

istence. It is the desire of the moth for the star. It is no mere appreciation of the Beauty before us, but a wild effort to reach the Beauty above. Inspired by an ecstatic prescience of the glories beyond the grave, we struggle.....to attain a portion of that Loveliness whose very elements, perhaps, appertain to eternity alone. And thus, when by Poetry or when by music.....we find ourselves melted into tears,.....through a certain petulant, impatient sorrow at our inability to grasp.....those divine and rapturous joys, of which *through* the poem, or *through* the music, we attain to but brief and indeterminate glimpses. (The Poetic Principle)

更に彼は美への郷愁を刺戟し、詩的情緒の源泉となる様々な地上の形象や心象の美をあげてゐるが、就中女性の容姿の美と心情の美に關しては

He feels it (the ambrosia which nourishes his soul) in the beauty of woman—in the grace of her step—in the lustre of her eye—in the melody of her voice—in her soft laughter—in her sigh—in the harmony of the rustling of her robes. He deeply feels it in her winning endearments—in her burning enthusiasms—in her gentle charities—in her meek and devotional endurances—but above allhe kneels to it—he worships it in the faith, in the purity, in the strength, in the altogether divine majesty of her *love*.

と稱揚し、特にその愛の信念、純粹さや力を強調してゐるのを見ても、いかに女性の美と愛が彼の詩的創造に靈感を與へ得たかを物語つてゐる。

以上の様に Poe の女性に對する愛の觀念は美への憧れと結びついた純然たる romantic idealism の現はれであつた。しかるに彼の詩の中では女性への愛は大方死と結びついてゐて、美は愛する女性の死といふ主題を通して表現されてゐる。この死と愛との結び付きの淵源を求めるために先づ彼の生涯に於ける女性關係を顧みる必要があると思はれる。

Poe は生涯を通じて数多の女性への戀慕の歴史をもつた人であるが、その特色は官能の匂ひのない浪漫的憧憬に終始するものであつた。彼の女性戀慕の第一頁をなすものは Jane Stith Stanard 夫人への熱愛であり、その愛と夫人の早逝は後日の Poe の女性に對する浪漫的憧憬を方向づけ、彼の生涯と作品をも支配した核心的な體驗であつたと思はれる。更に Virginia 大學へ入學する頃愛を誓ひ交した Elmira Royster との悲戀は第二の key point となるものであり、更には Poe は廿七歳の時結婚した當時十三歳の従妹 Virginia にも先立たれて居り、その死後は S.H. Whitman 夫人を始め幾人かの女性への同時的な狂ほしい求愛を試みてゐる。

これらの女性は各々の時期に Poe が熱愛した對象であり、しかも常に彼は死・別離によつて愛を失つてゐる。愛する者の死が痛切な追憶として人の心裡に宿るのは自然の情であるが、これらの愛と死の體驗がかくも Poe の心を強く把へ、且つ終生にわたつて彼の詩的想像の源泉となつたのは Poe の詩人的資質の獨自性によるものと見なさねばならぬが、之については後述に譲ることにして、先づ前記の女性の死や別離の體驗がいかにか彼の作品と結び付いてゐるかを考察してみようと思ふ。

Jane Stith Stanard 夫人は Poe の學友 Robert Stanard の母であり、Poe は十五歳の時始めて學友の家で夫人に會つた。養父母 Allan の許に物質的に恵まれた少年時代を過しながら尙孤獨感の強かつた Poe は、夫人の麗貌や、淑やかな物ごし、心情の優しさにふれて烈しい感動に把へられた。それは所謂 the one idolatorous and purely ideal love¹ であり、詩人としての最初の靈感でもあつた。夫人の美と情愛が彼の詩魂の歸趨を示したのである。後日 Poe は Marginalia の中で

The boyish poet-love is indisputably that one of the human sentiments which most nearly realizes our dreams of the chastened voluptuousness of heaven.

1 Sarah Helen Whitman: Edgar Poe and his Critics.

と述べてゐるが、之は正しく彼自身の夫人への熱愛の回想と見るべきである。爾來夫人は Poe のよき理解者となり慰め手となつたが 1824 年發狂して死んだ。Sarah Helen Whitman 夫人によれば、Poe はその死後數ヶ月は悲歎の餘り夜毎墓を訪れ、墓邊を徘徊したといふ。¹ この邊は Poe を浪漫化する物語めいてゐて眞實性は薄い、逝き母の再現とも思はれた夫人の死、而もそれが狂死であつた事は Poe に異常な衝撃をあたへた事は否めない。蓋し發狂した夫人も Poe 同様傷付き易い感受性と感情の持主であつたと想像され、魂の類縁を見出した本能的な牽引が二人の間に働いたのであらうし、Poe はこの純愛と愛人の死の中に終生の詩の motif を得たのである。愛はそれが失はれる時最も美しく愛も又別離にあふ時最も哀切な憧憬の對象となる。前出の *To Helen* は夫人を偲んでの作であり、愛の光を手にした女人像は永遠の美と愛の象徴に迄高められ、聖化された Stanard 夫人の面影と見るべきであらう。その日以来 Poe の心は愛する者の墳墓となり、死者への愛は彼の中に終生の憧憬となつて生きつゞけた。

Oh! that my young life were a lasting dream!

My spirit not awakening, till the beam

Of an Eternity should bring the morrow.....

I *have been* happy, though in a dream.

I have been happy—and I love the theme. (Dreams)

と Poe はかへらぬ日の幸福を歎じ、又夫人へのつきぬ追慕は

How shall the burial rite be read?

The solemn song be sung?

The requiem for the loveliest dead,

That ever died so young? (A Poean i)

と詠ひ出された。この譚歌體四行詩 *A Poean* (1831) は後に *Lenore* (1843) と改題、詩形も Pindaric Ode となり、詩想も著しく發展して圓熟した

1 Sarah Helen Whitman: Edgar Poe and his Critics.

elegy となつて發表された。

Ah, broken is the golden bowl! the spirit flown forever!

Let the bell toll!—a saintly soul floats on the Stygian river;

And, Guy De Vere, hast *thou* no tear?—weep now or never
more!

See on yon drear and rigid bier low lies thy love, Lenore!

Come! let the burial rite be read—the funeral song be sung!—

An anthem for the queenliest dead that ever died so young—

A dirge for her the doubly dead in that she died so young.

と堰を切つてうたひ出された第一聯の最初の句は舊約傳道之書十二章六節¹以下に依據して居り、*image* と音調の力が相俟つて暗示力に富み、迸る悲愁をよく現してゐる。詩は切々たる哀悼の華麗な調べに始まるが結尾では寧ろ憂苦に充ちた穢土を去つて天帝の下に歸る魂魄の冥福を祈る寂滅の讚歌乃至は凱歌ともいふべき高らかな調べとなつて終る。この凱歌調は Poe が Amelia Welby の詩の批評の中でのべてゐる悲歌の形式論の *experiment* と見られる。²

Avaunt! tonight my heart is light. No dirge will I upraise,

But waft the angel on her flight with a poean of old days!

Let *no* bell toll!—lest her sweet soul, amid its hallowed mirth,

1 Or ever the silver cord be loosed, or the golden bowl be broken, or the pitcher be broken at the fountain.....Then shall the dust return to the earth as it was: and the spirit shall return unto God who gave it. Vainly of vanities, saith the Preacher; all is vanity. (Ecclesiastes, xii, 6—8)

2 “When I say, then, that Mrs. Welby’s stanzas are good among the class *passionate* (using the term commonly and falsely applied), I mean that her tone is properly subdued, and is not so much the tone of passion, as of a gentle and melancholy regret, interwoven, with a pleasant sense of the natural loveliness surrounding the lost in the tomb, and a memory of her human beauty when alive.—Elegiac poems should either assume this character, or dwell purely on the beauty (moral or physical) of the departed—or, better still, under the notes of triumph.”

Should catch the note, as it doth float up from the damnèd
Earth.....

「愛する女人の死」は Lenore に於いて始めて明かな主題として現はれ、失はれたものへの哀惜と追慕を詠ふこの挽歌形式は、The sleeper, The Raven, Annabel Lee 以下幾多の變奏曲を生むこととなつた。

Poe と Elmira Royster との間柄は「たけくらべ」式な 少年少女の戀として不問に附され勝ちだが、Poe の心情の歴史からは見のがせない事實である。Poe は 1823 年頃から Elmira と相識の仲となり、1826 年 Virginia 大學入學のため Richmond を離れる迄には婚約も私かに取交してゐた様である。併しその後文通は Elmira の兩親に妨げられ、少女は不本意ながら A. Barret Shelton の許に嫁ぐ事となつた。Poe が始めて破縁の事實を知つて絶望したのはその年の暮、賭博の借金の事で父から退學の宣告をうけて Richmond にかへつた時のことであつた。この失戀は彼には痛切な挫折であり、心情の危機でもあつた。當時の彼の失戀の回想はたえず Elmira の死の幻影を結びついてゐて、彼の幻想の中に既に逝き愛人の心像の原型が存在してゐたか、或は徐々と形をとりつゝあつたことを物語つてゐる。To One in Paradise (1834) の第一聯で

Thou wast that all to me, love,

For which my soul did pine—

と呼びかけてゐるのが Elmira であることはこの詩の載つた Southern Literary Messenger, Tales, Broadway Journal 等の諸誌では他の男性との婚姻を指示する聯が最後に加へられてゐる事からも明かである。¹ この詩で Elmira は逝き人としてうたはれてゐる。

1 Alas! for that accursed time

They bore thee o'er the billow,

From love to titled age and crime,

And an unholy pillow—

From me, and from our misty clime,

Where weeps the silver willow. (To One in Paradise v.)

詩人は回想の中で逝き愛人への憧れを吐露し、かつてその愛の果實を享受し得た悦びをうたふが愛の喪失と共に生命の光も消え、森も小徑も泉も少女の美と共にすべて過去の深淵に沈み、希望の命短かさに茫然自失する魂のみが取残され、たゞ愛人の麗容を思ひ浮べ、その追憶に陶醉することのみ慰安を見出すのである。

And all my days are trances,
 And all my nightly dreams
 Are where thy dark eye glances,
 And where thy footstep gleams—
 In what ethereal dances,
 By what eternal streams. (To One in Paradise iv)

しかもなき愛人の夢は彼の中に凝集し、沈潜して前途に新しい希望が自分を誘ふ様に思はれても、過去の追憶から逃れ去ることが出来ないのである。¹ この幻想と追憶の虜となる孤獨な魂の姿は Poe の詩の著しい特色をなすものであり、後期の作品では一層深化した形で現はれてくる。

Poe は長く Elmira の變心が信じられず、自分が二人の誓ひに誠實であることを度々詩に托して詠つてゐるが、Elmira の婚禮の日のうた Bridal Ballad (1837) では背かれた男性は既に逝き人であり、花嫁は死者が誓を守つて幸福に死んだ事を想ひ、却つて歎く形を取つてゐるし、長詩 Tamalane (1827) では野心に充ちた Byron 風の英雄 Tamalane が戀人を残して遠征し、武勳を立て、乙女の許に歸つた時、既に逝き彼女を見出す物語で、この詩が Elmira との戀愛の挫折を背景としてゐることも、諸説の一致する所である。

Poe は 1835 年 Baltimore の伯母 Clemm 夫人の許で、彼の従妹 Virginia と結婚したが、花嫁は時に十三歳であつた。この子供妻の事を彼は Sister とか Sissie といつて兄妹の如く睦み合ひ、爾後 1847 年の Vir-

1 To One in Paradise ii.

ginia の死まで Poe は、病ひ勝ちとなり、次第に消耗して行く Virginia の容貌に「逝き女人」の幻想の源を得てゐたのである。後期の作品には初期の詩 *To Helen* に見られるやゝ観念的な美と愛への憧憬や *To One in Paradise* その他の詩に見られる甘美な感傷性が後退して愛と死の結び付きはより必然的となり、よりきびしい宿命の色を帯びて来る。

こゝにその代表的なものとして *Ulalume* をあげる。1847 年 Virginia の死後間もなく出版されたこの詩は言葉の幻術ともいふべき韻律の妙と、すべての意味を暗示に隠した幽微な情調とによつて言ひ難き象徴の世界を現出してゐる。

詩人は蕭條とした秋の夜半、絲杉の小徑を逍遙しながら、孤獨な身の上や、暗澹とした前途について自分の魂 *Psyche* と對話を試みてゐる。¹ 彼はその夜が何を意味する時日であるかを一時忘れてゐる。やがて真夜中はすぎ星時圭が黎明を指し示すとき空が微茫と明るんで一對の角をつけた *Astarte*² がさし昇つて来る。詩人はこの星に新しい希望と愛とを暗示されたやうに思ひ、一方 *Psyche* が之を凶兆の星と見て恐れ悲しみつゝ彼を諫める言葉を制して「光り輝くその眼に愛をたゞへた」*With love in her luminous eyes* 星をしるべに前途に幸福の有無を尋ねて導かれて行く。

Let us on by this tremulous light!

Let us bathe in this crystalline light!

Its Sybilic splendour is beaming

With Hope and in Beauty tonight! (Ulalume vii)

星のその眞上に昇つてゐる道のはたてに着いた時、彼は一つの墓の前に出

1 浪漫派の分身出現の一例。Hoffmann, Kleist 等が屢々用ひた。

2 本文には *Astarte's bediamonded crescent / Distinct with duplicate horn* とある。*Astarte* は本来フェニキア人の月の女神を指し又愛の女神でもある。Whitman 夫人は Mallarmé への書簡中之を月でなく金星なりといふ。Poe の他の詩 *Eulalie* 中では *Astarte* は金星を意味してゐる。之を新月と解する諸家も多い。Prof. Trent は之を Poe の新しい愛の象徴とみ、H. Allen は *Dian* が Virginia の純潔な、処女の愛を表徴するのに對し、*Astarte* は *physical passion* を表すと説き、J. W. Robertson は一般的な意味での希望や、平安を意味すると説いて、諸説は一致しない。

る。その墓標に讀まれる文字は逝き *Ulalume* の名である。詩人の驚愕。そして突如去年の今夜彼女の骸をこゝに運んだ事が恐怖と共に蘇る。幸福への豫感は一瞬の幻影と消え去り、彼は再び絶望にとらへられ「われをこゝに誘ひしもの、そは何の魔性のわざぞ？」 Ah, what demon has tempted me here? と叫ばずには居れない。

この詩は *Virginia* の死後絶望と混迷に呻吟する詩人の魂の最も spontaneous な流露であり、又偽らざる詩人の自畫像であるともいへる。この詩に象徴されたものは詩人が希望を求めて進まうとする時、常に彼のゆくてに現はれる一つの墳墓、常に彼をその中に隠された悲しくも恐ろしいもの、しかも彼を魅了してやまぬものの虜とする墳墓、即ち彼が「逝き愛人」の追憶から永久に離れ得ぬといふ宿命である。この宿命觀は初期の作品の

A voice from out the Future cries,

“On! on!”—but o'er the Past

(Dim gulf!) my spirit hovering lies

Mute, motionless, aghast! (To One in Paradise iii)

といふ聯にも豫示されて居り、又 *The Raven* の中でも Poe は大鴉に沈痛な終りなき追憶を表徴せしめ、

Take thy beak from out my heart, and take thy form from
off my door!

Quoth the Raven, “Nevermore.”

(The Raven xviii)

及び、結尾の

And the lamp-light o'er him streaming throws his shadow
on the floor;

And my soul from that shadow that lies floating on the floor
Shall be lifted—nevermore!

(The Raven xviii)

なる二句に暗示的語法を用ひて、主人公が永久にこの「なき愛人」の追憶

から脱し得ない宿命を象徴化することに成功してゐる。

1847年 Virginia の死は再び彼の宿命観を實證することゝなつた。Poe の最後の最も美しい哀傷詩 *Annabel Lee* は奇しくも 1849年 Poe の死んだ二日後に *New York Tribune* に掲載された。これが稚な妻の Virginia と彼自身を詠つた詩であることは “*I was a child and she was a child* 又 *Our love it was stronger by far than the love of those who were older than we*” といふ句によつても明かである。全篇に眞摯な愛戀の情と、愛人の美と愛との追憶に純化された悲哀が透み通つて居り、素朴な韻律の効果と相俟つてこの詩を Poe 最高の抒情詩たらしめてゐる。運命は避け難く二人を引き離すが此處ではもはや死は恐るべきものではなく寧ろ慕はしきもの願はしきものである。詩人は「愛と死」の宿命をも肯定して自ら愛人の墳墓の傍に横たはり、死も之をさくことの出来ぬ愛の成就を夢みる。

And so, all the night-tide, I lie down by the side,

Of my darling—my darling—my life and my bride

In the sepulchre there by the sea,

In her tomb by the sounding sea. (Annabel Lee vi)

常に死の觀念にとらはれてゐた Poe は有機的生命の終つた後の世界に關しても彼一流の關心と考察を加へずに居れなかつた。For Annie (1849) では主人公は死後床の中に横たはりながら、苦惱と呻吟にみちた人世を去つて亂されぬ休息を得、尙愛人の愛と信實を確信し得るが故に心みちたりた状態をうたふ。人生は悪感を伴ふ一つの熱病である。死はそれからの解脱であり回癒である。彼は安堵と共に死に入り、戀人の麗容と眞實への追想に溺れながら天上的な幸福を享受する。最後の一聯は Lenore の結尾の凱歌調を思はせる、死をも克服する愛の歡喜であるといへよう。

But my heart is brighter

Than all of the many

Stars in the sky,

For it sparkles with Annie—

It glows with the light

Of the love of my Annie—

With the thought of the light

Of the eyes of my Annie. (For Annie xii)

以上は Poe の女性關係と作品を對照させながら主として作品中の死と愛の結び付きを跡づけたのであるが、To Helen に現はれた美への憧憬、Lenore に於ける死んだ愛人への追慕、To One in Paradise の失はれた希望への悲歎、これらの詩想が彼の青年時代の一聯の體驗と切離し難い關係をもつてゐる事はいふ迄もない。即ち Stanard 夫人の死、Elmira との別離、更に加へれば生母 Elizabeth Poe と養母 Frances Allan の死、之らの體驗は彼の回想の中でとき難く結びつき、その面影は互に混淆し融合して何人とも指摘し難い一つの「逝き女人」の心像に彫上げられたのである。かくて死と愛の觀念は彼の中で有機的に結びつく事となり、且つ又死者への涯なき憧憬は一種の感情的耽溺となり、やがては彼の想像の中核に根を下して病的な固定觀念となつた。彼の想像は之によつて形造られてゐたが故に彼はそこから逃れることが出来なかつたのである。従つて彼の中には愛と死に關する宿命觀が次第につくりあげられ、彼をして爾來、この「逝き愛人」といふ同一主題の變奏曲を繰返し生み出さしめることゝなつたのである。

若き日の Poe にとつて、Stanard 夫人を始め幾多の女性の死や別離は愛の瓦解喪失をもたらす事によつて詩人の感性を蝕み、その心情の中に一つの廢墟を形造るに至つた。死は現實となつて彼の中に息づき始めたのである。しかも終生彼はこの廢墟から逃れようとしなかつた。否むしろ逃れることが出来ないで、この廢墟に佇んで回癒しがたい喪失の悲哀と逝き愛人への憧憬をうたひつゞける人となつた。しかしこの内なる廢墟を直視しながらうたひ出す所に始めて彼は自己の詩の本領を見出したといつてもよ

い。そしてこの頃から彼の「時」と「所」からの遊離と、崩壊の一步手前にある物影の世界との聯合が始まるのである。それは *The Sleeper* に描かれた、萬象は月光と霧の中に沈み、寂として死の眠りをまどろみ、森深き所の墳墓おくつきには美しい女人が「運命と相抱いて」横たはる世界である。

All beauty sleeps!—and lo! where lies.....

Irene, with her Destinies! (The Sleeper i)

それは又散文 *The Fall of the House of Usher* の、見えるもの凡てが荒廢と解體の危ふさを豫示する、陰暗な沼澤風景として描かれてもゐる。そこは又悪しき天使らが出没し夜（即ち死）が黒い玉座に君臨する道を経て彼が辿り着いた「時と所をこえた」(*Out of Space—out of Time*) 幻想の國土として描かれてゐる。

I have reached these lands but newly

From an ultimate dim Thule—

From a wild weird clime that lieth, sublime,

Out of Space—out of Time. (Dreams-Land i)

Poe は *A Dream within a Dream* (1827) に於いて、人生の希望の儂なさを、指の股を滑り落ちて、波に流され行く一握の砂に托して詠ひ、人生は一場の夢であり、見ゆるものはすべて夢の中の夢にすぎぬと觀じたが、彼にとっては可見の現實は假象の世界と思はれ、現實を超えた夢と想像の領域のみが平安と満足を見出しうる場所であつた。かくて彼は現實世界との生きた接觸を次第に失つて行き、彼自身の *dream land* に沈潜して「逝き女人」や「過去と呼ぶ帷子をきた思ひ出」*Sheeted Memories of the Past* (*Dream-Land ii*) と共にこの世界に棲むことに却つて愉悅を見出したのである。故にこそ彼は次のやうにうたふのである。

For the heart whose woes are legion

'Tis a peaceful, soothing region—

For the spirit that walks in shadow,

'Tis—oh, 'tis an Eldorado! (Dream-Land iv)

「世界は夢となり、夢は世界となつた」といひ、又「どんな夢も人間の心の内部に垂れてゐる神祕なとばりに出來た意味ふかい裂目」¹ であると言つた Novalis も現實をこえた夢と心情の領域に生の原體驗を持ち得た人であるが、Poe も又 Eleonora の冒頭で

Those who dream by day are cognizant of many things which escape those who dream only by night. In their gray visions they obtain glimpses of eternity, and thrill, in waking, to find that they have been upon the verge of the great secret.

と述べて居り、無限の想像と白晝夢に於ける生を最も鮮烈に生きた人であつたが、唯その領域は年と共にある固定觀念に占められるやうになり、彼自身をそこから脱出させ得ない病的な性質を帯びるやうになつた事は疑へない。事實彼の現實社會や、生きた人間そのものへの無關心は作品の情景や人間に具象性や生命的なものを失はせ、彼の特異な内的 image の投影に過ぎないものとしたのである。蓋し彼の關心は常に自己及びその心靈の内部にのみ向けられ人生から多くを學ぼうとせず、普遍的な意味で人生や人間を愛することの出來ない自我の人であつたからである。従つて彼の描くものは彼自身の幻想や病的な心理から生み出された傀儡の如き特殊な人物や影像である。彼はそれらを描くことを欲して描いたといふよりむしろそれ以外に彼の描く領域はなかつたのであり、それが彼の catharsis の場であつた。Berenice の主人公の

The realities of the world affected me as visions, and as visions only, while the wild ideas of the land of dreams became, in turn, not the material of my every-day existence, but in very deed that existence utterly and solely in itself. (Berenice)

と語る孤獨な dream land こそは Poe 自身の内的世界であつたといへよう。以上の様に Poe が現實を遊離して「逝き女人」の幻想を追うて止

1 Novalis: Heinrich von Ofterdingen.

まなかつた事は、散文中にも、彼の現實生活の中にさへも求められる。例へば Eleonora, Ligeia, Morella 又 Usher 家の Madeline 姫などいづれもその名稱からして現實離れのした、影の如き人物であり、氏素姓も曖昧な何時何處で知合つたかも明らかでない、容貌の特徴といへば蒼白な皮膚、謎をたくへた眼、音樂的な美聲又は女性美の象徴たる丈長の髪であり、時に異常な學識と犯し難い威厳をもつた女性でもある。之らの heroine は例外なく不可解な病氣に冒されて死の中に歩み入つてしまふ。この様に散文中の女性も超自然的な影をおび常に死と解きがたく結びついてゐる。彼女らは彼の意識下につき纏ふ「逝き愛人」の心象の投影であり、更にいひかへれば天才と狂氣の境に立つてゐた作家の存在の中核に根を下した病的な obsession の産物であり、彼自身現實界で成就し得なかつた女性への憧憬の symbol なのである。又 Poe の十三歳にしかならぬ従妹 Virginia との結婚について、ある批評家にいはせれば之は彼の衝動性の現はれであり無暴な行爲であると論じ、反面 J. W. Robertson などは之を慈悲深い 献身的な行爲と見てゐるが、當時の America 特に南部では早婚は左程珍しくなく十六歳位で母となる少女も往々あつたといひ、又一家を支へる男性の腕を必要とした伯母 Clemm 夫人と、安住すべき家庭と女性の愛護を欲した Poe の要求が合致した結果でもあらうが、又一つにはこの結婚は Poe の内なる神祕の核心に通ずるものであつたのである。即ち少女の容貌や性情に Poe の偏執的な想像の要求に合致するものがあつたからで、Poe は彼女の中に幻想の中の戀人を見出し之を熱愛したのである。いはゞ Virginia は彼の心の廢墟に咲いた架空の花であり、生ける Strnard 夫人でもあり Elmira でもあつたのである。しかも Virginia は精神的には發達の未熟な女性で、いつ迄も失せぬ清らかな小兒的特長、青白い不健康な皮膚、いはゞ成熟した女性の性的魅力に乏しい美しさが彼の非現實的な女性美の嗜好を満足させたものと見てよく、Virginia の面影は Poe の短篇中で Madeline や Ligeia として又詩では The Raven, Ulalume, Annabel

Lee などの中の heroine として影を投げて居り、つねに死んでゆく女性の原型であつたのである。

こゝで今迄考へられた Poe の内的世界を獨逸の浪漫作家の Novalis と對照して考へてみよう。Novalis も若い頃の戀人 Sophie の死によつてその生涯を支配された人であつたが、有名な墓畔の體驗によつて神祕的な夜の内面的世界に目醒め、愛は現世のみに止まるものではなく夜の世界こそ戀人を我がものとなし得る所であるといふ確信を得て悲哀から解き放たれ、夜と永遠の眠りへの憧れをうたふに至つた。即ち彼の戀人への變らざる愛は死と運命を超克してより高次の内的生命の存續する世界に目を開かしめ遂には Christ の愛と死の眞義を諒解し、Sophie への愛と Christ への思慕は合體し、十字架は愛人への憧れの象徴となつた。Poe も死や別離といふ苦汁を味はつて現實の頼み難さを痛感し、外なる世界に眼を向け、内に沈潜する傾向を強めて行つたが、彼はやがてこの悲哀から解脱して永生の愛に向ふ清明な心境には到り得なかつた人であつた。彼は悲哀や絶望から逃れようとしなかつた許りか、却つて己れの悲劇の中から獨自な美を生み出す境地に詩人としての本領を見出したのであつて、この事はあく迄も彼が美を至上の目的として追求した作家であり、靈魂や眞理を求めた作家でなかつた事を意味してゐる。彼の場合は死せる戀人は常に彼の内なる墳墓に横たはり、或ひは彼の地上を遊離した心象風景にふさはしくこの世のものならぬ神祕的な美をたゞへ、時には異教のマリヤの如き奇異な風貌さへ帯びて、その背光で Poe の廢墟を照らす女人像となつた。彼は自己の悲劇そのものに美を見出したが故に却つてそれに自己苛責的な悦びをさへ感じながらこの廢墟に沈湎し病的なまでの情熱の力をもつてその凄然たる美を詩や散文に描き出したのであつた。そしてこの情熱の根源となつたものは飽くことを知らぬ美への愛であつたことはいふ迄もない。

以上は Poe の作品の中核をなす死の觀念、特に愛人の死の觀念について作品と對照させながら主として Poe の對女性の體驗にその淵源を求め

たのであるが、無論 Poe の作品の背景をなすものは女性關係に止まらず、如上の作品の獨自性はむしろ體驗以前の氣質や、その他の環境に負ふ所が極めて多いと思はれるので次に簡単に彼の生ひ立ちについて記してみる。

Poe は 1809 年旅藝人 David Poe 夫妻の第二子として生れた。曾祖父 John Poe は Ireland 系の移民であり、父は法律の勉強を一擲して旅廻りの劇團に身を投じた衝動的な熱情家であり、母は二代續けて聲樂の才ある英國人女優であつた。Poe は父方から Celt 特有の鋭い美感、熱情、幻想的な性情を、母方から音樂的な感受性や過敏な神經を受けついでゐるが、この二様の遺傳質は Poe の文學傾向を決定する重要な因子として見遁せない。Poe 自身が烈しい熱情家であり又幻想性に富んでゐたことは *The Fall of the House of Usher* や *Berenice* の主人公の血統の描寫やその他作品の諸處に見出されるが、彼の自叙傳的作品 *William Wilson* 中の

I am the descendant of a race whose imaginative and easily excitable temperament has at all times rendered them remarkable;.....As I advanced in years it was more strongly developed;I grew self-willed, addicted to the wildest caprices, and a prey to the most ungovernable passions.

といふ一節には最も精確な Poe の自畫像が描かれてゐる。又 Poe は幼少時から外界の印象に異常に鋭い感覺をもち特に聽覺に秀でてゐたが、之等諸感覺と想像とのいみじき聯合は

Witness the murmur of the grey twilight.....

That stealeth ever on the ear of him.....

Is not its form—its voice—most palpable and loud?

(*Al Aaraaf*, Part II. St. iii)

又、the humming of the moon, lovely purple perfume, the red withering wind, the sound of the coming darkness¹等の諸句に窺はれ、

1 *Al Aaraaf* 及び *Tamalane*.

The orange ray of the spectrum and the buzz of the gnat (which never rises above the second A), affect me with nearly similar sensations. In hearing the gnat, I perceive the color. In perceiving the color, I seem to hear the gnat.

といふ *Marginalia* 中の一節にも特異な視覚と聴覚の交感として現はれ、更に之が晩年の作 *Colloquy of Monos and Una* に至つては、私共がまだ意識のさめ切らぬ暁にか、病患の嗜眠状態に於て稀にしか経験することの出来ぬ特異な感覺状態を展開する。それは印象に對して純粹に受身な殆ど物質的な状態であり、視聴覚は勿論全身の感覺が混淆し融合して、印象は直接想像の上に投射されて七色の想像の虹を現出し、又印象に應じて思考を交へぬ純粹な感情が起る。その様な、Baudelaire の「馨と、色と、物の音と、かたみに應ふ」*Les parfumes, les couleurs et les sons se répondent*¹.....といふ「萬物照應」の象徴世界の prototype さながらの交感の極限の境地が描かれるのである。このやうに Poe の感覺は外界の事物に對して複雑に反應しながら彼の想像と感情の領域を擴大したのである。特に注意すべき事はこの鋭敏な感覺を通して事物の印象が想像の上に落ちるとその誘發した際限のない幻像と感情の中に溶け込んでありのままの姿は見失はれ、摑へ難い情調の中に暗示されるに留まることとなる。この情調を生み出す力は彼の最も特異な能力であり、彼の文學的個性の強みでもあつたが、この事は同時に彼をしてあるがままの客觀的世界から逸脱して自己の幻想と氣分の中に耽溺させる傾向を助長したといふことである。

之らの遺傳質の中今一つ注意すべきことは Poe が酒亂症 *dipsomania* の病疾を父から受け繼いでゐたことであつた。酒癖は彼の生涯の敵であり、彼は絶えずこの誘惑とたゞかひ乍らこれに打負かされるのが常であつた。彼はこのどうしようもない遺傳病疾、即ち自己破綻への素因を内に持ち、事實上絶えず内的生活の危機に直面してゐた人であつた。従つて彼は

1 Baudelaire: *Correspondances*.

一種の破滅への豫感につねに脅える人であつたともいへる。そしてこのことは又彼の作品に現はれる逃るべからざる死や破滅への宿命觀や、恐怖となつて反映してゐるものとは考へられないであらうか。

Poe は兩親の死後 Richmond の Allan 家の養子となつたが、七歳の頃養父に伴はれて英國へ渡り、こゝで五年間古風な英國式教育を受けた時代がある。London 郊外の靜かな古雅な町の描寫は G.E. Woodberry (1855—1908) の傳記に詳しいが、その傳説や古蹟に恵まれた土地、物皆の輪廓を朧ろにする霧深い氣候、陰鬱な學校での授業、さうした環境が少年の柔かな感覺と精神の上に如何に消し難い印象を残したかは、

The teeming brain of childhood requires no external world of incident to occupy or amuse it; and the apparently dismal monotony of a school was replete with more intense excitement than my riper youth has derived from luxury, or my full manhood from crime.

(William Wilson)

と述べてゐる所からも明らかである。それは彼にとつては a period and locality when and where I recognize the first ambiguous monitions of the destiny which afterward so fully overshadowed me.¹ であり、それは又後日彼を America 本國から切離して生涯の Bohemian 作家となし、彼の「時と所」をこえた exoticism や古代的神祕的なものへの思慕、さては滅び行く頽唐の美への郷愁となつて發現したものである。

英國での學生時代、Poe が愛讀し、生涯座右の書としたといふ Select Beauties of Ancient English Poetry² なる詩集があつたが、彼はその中から Henry King の詠ふ

The beating of thy pulse (when thou art well)
Is just the tolling of thy passing bell.

1 Poe: William Wilson

2 H. Headley により、elegy や epitaph を集めたもの。

Night is thy hearse, whose sable canopy
 Covers alike deceased day and thee,
 And all those weeping dews which nightly fall
 Are but the tears shed for thy funeral.

といふ様な沈鬱な詩美に把へられたが、内省的な少年の心には既に愛するものを彼から奪ふ暗い死の影が忍び込んでゐたやうである。

彼は Allan 家の養子となつてからも、Virginia 大學時代も兎角しがな
 い旅藝人の孤兒だといふ劣等感が氣位の高い少年の心を傷付け、孤獨を
 愛すると同時に自己の天才の獨自性を自負する少年となつてゐたことは
 初期の Alone (1875) なる詩にも窺はれる。養父との確執が甚だしくなり
 1827 年 Allan 家を去つて餓えと彷徨の生活が始まると孤獨感や人生の無
 常感は愈々彼を蝕み、反社會性や現實遊離の傾向は漸く強くなつた。彼が
 家出をした 1827 年頃の作 The Lake には既に色濃い pessimism と死へ
 の甘美な幻想が見られる。若さからの感傷もあつたであらうが、廿歳にみ
 たぬ頃から彼の心には早くも生の黄昏を豫示するやうな暗い影がさし始め
 て居り後年の失意と悲哀の詩人の片鱗を窺ふ事が出来よう。

以上の如き Poe の個性を形造る鋭い美的感覺と想像力、幻想性、熱情
 性、自己愛、反社會性等の傾向は相助けて彼を現實から遊離して、自己の夢
 想世界に沈潜せしめ、更に愛人の死や失戀の體驗と結び付いて死や滅びの
 姿を通して美を詠ひ出す獨自な詩境の本質をなすものとなつたのである。

尙 Poe の現實遊離の傾向について今一言を費すならば、近代の精神病
 理學の光に映し出される Poe の性格は Kretschmer のいふ分裂性々格
 (Schizoidie) の典型であり、彼や Bleuler の説を繼ぐ E. Minkowski 説
 く所の「現實との生きた接觸」Contact vital avec la réalité を喪失し勝
 ちな特異性々格の持主であつたといへよう。この性格の人間はいはゞ一枚
 の硝子板をへだて、人間世界と向き合つてゐる人であり、彼と現實との生
 の流動は失なはれ、彼は自己自身の夢想の世界に沈潜する。他の人間は特

殊の場合を除いて彼の接觸する生きた人格といふより灰色の背景に過ぎない。従つて個人差などは餘り問題にならない。彼は人と接しても自他の間に感情的調和を見出す事が困難であり人を理解しようとしなない。自我は極度に強大となり、一人感じ易い魂を抱いて現實の鬭争の場を貴族的な傲岸さを持つて見下してゐる。Minkowski はこの人格の孤立を現實界の強烈な色彩や強い音響、烈しい葛籐から過敏な魂を保護するためと解釋し、「彼は生れ乍ら悲劇への素質を持ち、常に『自己と世界』といふ二律背反を極度にまで押し進める。従つて彼は環境との不斷の葛籐の霧圍氣の中に生きる。冷やかな egoism、過度の自尊心、不斷の自己分析癖が絶えず彼を追ひ立てる結果、彼の生涯は憊なき苦痛の連続である」¹ と述べてゐる。

Poe の短篇の中に現はれる主人公の多くは Poe 自身の投影であり、特に Usher 家の主人公 Roderic や William Wilson 等は正しく Poe の自畫像に外ならないが、これらの主人公は精神病學的考察の好對象となる様な病的な神經と心理の持主である。例へば Berenice の主人公は彼の耽溺する白晝夢の状態を

During the brightest days of her unparalleled beauty, most surely I had never loved her.....feelings with me, *had never been* of the heart, and my passions *always were* of the mind..... she had flitted by my eyes, and I had seen her—not as the living and breathing Berenice, but as the Berenice of a dream; not as a being of the earth, earthy, but as the abstraction of such a being; not as a thing to admire, but to analyze; not as an object of love, but as the theme of the most abstruse although desultory speculation.

と語つてゐる。阿片喫飲者の夢とも解されるが、この極端な現實遊離、自

1 Eugène Minkowski; La Schizophrenie, Psychopathologie des Schizoides et des Schizophrènes. 1927.

己耽溺の症状は、Poe 自身の内的経験の所産以外のものではあり得ない。唯 Poe が天才たる所以は、彼自身の危機に外ならぬこのやうな理性と狂氣の境によろめいてゐる人間の精神を些かの狂ひもない明哲な頭腦を以て描き出しえた點にある。そして Poe がこの様な内閉性々格の持主であつたことを認めれば彼が生きた社會や人間性を描き得ず、人情の機微の描出や humour を缺いてゐたことも肯けようし、彼の異常な心象風景はひとしく彼の内的苦惱の投影であり、彼が自己の世界に身を置くことによつてのみ外界との不調和から來る生の破綻への不安から逃れ得た事情を理解することも出来さうである。Poe が自己の内なる廢墟から脱し得ず常に局限された一小世界をしか描きえなかつたこともかゝる病理學的素因にも求められるべきであらう。

以上述べた所を總括すれば、Poe にとつて美は永遠なるものゝ一つの象徴的な表現であり、無限への憧憬は即ち美の渴仰となり、それは又理想美の具現としての女性への愛と讚美となつて發現したのである。且つ又氣質の中なる現實遊離の傾向や、墓畔文學の流を汲む死や夜や墓地等に關する沈鬱な幻想への偏向は Stanard 夫人その他愛する女性の死や別離の體驗に裏づけられて、彼の美への憧れが詩となる時、彼は常に美しき女性の死を導き入れずには居れなかつた。かくして美と愛と死の觀念は不可分に結びついて、Poe 終生の作品の motif となり、彼をして「死が美の吐息と己が吐息とを交へる所ならでは愛し得ない」I could not love except where death was mingling his with Beauty's breath¹ 詩人たらしめたのであつた。蓋し Poe は己れの廢墟に棲みとゞまり、失はれた愛を美化してうたふ一方、彼自身の死と滅びを豫示する宿命の暗さを描いてやまぬ境地に自己の詩領を見出したのであり、彼の浪漫文學が魂の文學ではなく、美に沈湎する文學以外のものとはなり得なかつた所以である。

1 Henry King.